

特67

405

柿山伏



204396-000-0

特67-405

柿山伏

東京堂

M33

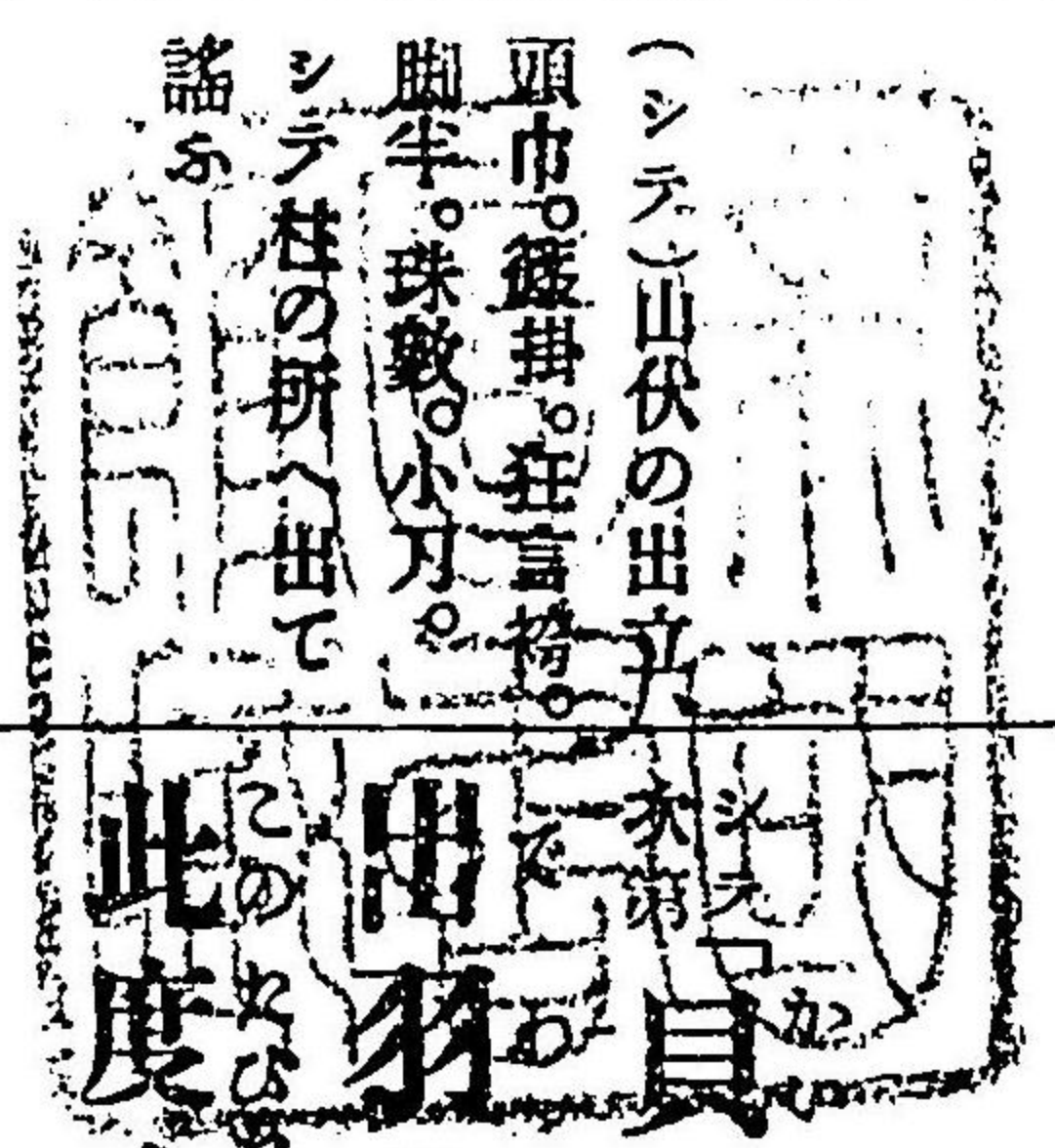
EDS-0029



是ハ我が國喜劇の祖たる能狂言の詞書でムる某幼少
 の折鷺仁右衛門の門弟大場辰次郎と云ふ先生より學
 び得たるまゝ三十餘年の久しき間空しく篋の底に埋
 らせてあたら金玉を虫に喰み盡されんと致いてれりや
 るに依て今度梓に彫りて江湖に頒ち同好の諸士と共
 小花の朝月の夕の遊謙に面白可笑しく謠ひつ舞ひつ
 永久に樂まばやと思ひ立て候

麴町住 太郎冠者庵主人誌

此狂言は出羽の國羽黒山の山伏が回國中或日途中に於て飢渴に迫り主ある畑
 の柿の菓を盗み取て喰ひしに折柄畑主の知る所とあり様々に翻られ遂に途上
 へ投出されたる様を作りたるものなり



(シテ)山伏の出入
 頭巾。籠掛。狂言持
 脚半。珠敷。小刀。
 シテ柱の所へ出て
 謠ふ

柿山伏

此度大峰葛城を仕舞只今が下向道でムる先づ
 そろりくと参らふ楮も我等の行躰といは野に
 伏し山に伏すに依ての山伏でムる夫故に空飛
 鳥をも祈り落す程の行力でおりやる楮某は今朝
 未明より出たれば殊の外喉が乾く湯でも茶で
 も呑たる事おやイヤあれに赤ふ見ゆるは紅葉
 か何であらふぞよよく見れば柿乃木おやあれ

ワキ柱の方へ目を
 ソナン

柿山伏

左の手よて右の袖
を抱えワキ座に向
て磔を打形をする

ワキ座の所へ腰桶
を出し夫へ昇る

(アト)立出狂言袴、
肩衣。腰帶ニテ。
シテ柱の所へ出で
る

を一つひるやりと喰たあらば喉の乾も止ふが
やあら何とせふぞ先づ磔と打て見ませふ當れ
ばよふムるがイヤーエイ行過たやあら何とせ
ふぞ此刀にて拂落そふエイくエイ是でも届
ぬイヤ幸あれに木の根があるあれら這上て
取ませふ去あふら誰も人は居ぬあきらん幸
誰も見者あまる幸の所に木の根が有て仕合に
存るエイくヤットナ下あら見たとは違て殊の外
見事の柿おやさらば是を喰ふ儲もくうまる事
おやウムくくアト 是は此邊の者でムる某田畑と

誠より進み出で
舞臺をト回す
る

何かどよて元の座
よかえる

多敷持てムるが久ふ見廻ぬに依て今日は見廻
ふと存る誠たはたに田畑あまたもつを多敷持た衆もムれども某
の田畑たはたのよふに毎年まいねんよふ出来る事は無と有て
人の譽物ほめものに致さるゝ事おや何と申内則ち是
おや久ふ見廻ぬ内うちに殊ことのほか成長致した柿も
よふく色付てムる近々ちかぢか枝を落そふと存ずる
是は澁柿しぶかきおやアト 是はるあ事行衛も
知ぬ山伏やまふしが人の柿かきの木きに登て柿かきを喰ふ何とせ
ふぞイヤ思出るた悪も憎しチト威おどるてやりま
せふエヘンくシテ 是はるあこと畑主はたぬしが見舞た

笑ふ

そふまアア不思儀や此柿の木は風も吹ぬに
 動く鳥類畜類でも付たる知らんオ、動くこそ
 道理あれ大きな鳥がとまつて居る。是はるあま
 こぞ某の事を鳥おやと申頭巾が黒るに依て鳥
 おやと申そふも志れぬ。鳥と申ものは熟菓を
 好に依て喰るは尤おや鳥と云ものはよふ啼も
 のおやが啼ぬあ知らん啼ふぞや汝啼ぬに於て
 は其半弓を持ってこゝる。一矢に射て吳よふぞ啼ふ
 ぞよシテ是は啼すば成まる。カア〜カア。アトカア〜
 アハ、ア。偕も〜よふ啼たり〜人と鳥と見違ふ

見付柱の所まで出る

よふにカア〜カア。アハ〜ア。此様あ鳥とば前に
 廻てと〜くり見て置ふ。是はるあな事鳥と存たれ
 ば大きな猿でムる。是はるあかな事某の事を猿
 おやと申偕も〜苦々敷事おや。猿と云ものは
 猿手を遣て唯は居ぬものおや。猿手を遣はぬ
 あ知らん猿手を遣ふぞよ。猿手を遣すばある
 まい。オ〜遣は〜。今一方も遣ぞや。オ〜遣は〜
 偕猿と云ものは人を見ては白る齒をむき出て
 よふ威すものおや。威さぬあ知らぬ威そふが
 よ。汝威さぬに依ては其手鎗を持ってこゝる。唯一突

後ろえ廻て見又元
此座え歸る

扇を持って手柏子に
かゝつて斬す

に志て吳ふぞ。是の威さずば成まい。キャア〜
アトキャア〜アハ〜ア今の猿のよふ威たり。此様
猿をば後廻てとっくり見て置ふ。是はるゝな
事猿おやと存たればあれは大きい鳶でござる
是はるゝな事某の事を鳶トやと申。鳶と云
ものはよふ羽をのすものトやふ羽をのさぬか
知らぬ。羽をのさずば成まる。オ〜乃すはく
今一方も乃そふぞよ。オ〜乃すはく。偕此上は啼
て飛一段でムる啼ふぞよ。チト噺てやりませふ。
飛そふな啼ぞよく。是はいかな事飛ねばなる

正面ノ中央に飛び
下る

まゐる。ヒイヒヨロ〜。ヒイ〜あるたく。御客僧
あ乃高る木の空あら御飛て腰を打は召れぬ。
ヤイ〜やる其所あ奴。何とぞおや。やあら
汝悪る奴め最前あら此貴る掛出の山伏を鳥類
畜類に譬る乃みあらず加之鳶おやと云想トて
山伏の成の果は鳶にもあるものおやと云ふに
依て若し鳶にも成たと思ふてあの高る木の
空あら飛たればまだ羽もはへぬものを飛せて。
腰の骨を夥ら打た。汝の宿に連て往て養生せぬ。
行衛も知らぬ山伏の人の柿の木に登て柿を

橋掛りへ行ふとす
る

喰乃みあらず其上腰の抜たを宿へ連れて往て養
生せふ子細かあるよ。子細が無と餘の山伏を
棚たとは物が違ふぞ。實に掛出の山伏は聊示
に棚らぬものおやと申さわらぬ。躰にて宿へ歸
ふと存る。ヤイく其所な奴。何事おや。何所
へ行。宿へ參る。是へ來る。何事おや。最前も
云ふ通り。汝の宿へ連れて往て養生せむ。最前も
云ふ通り。養生せふ子細がなるよ。其様な事を
云ふたならば。只今悔むことが有ふ。夫は誰が
某が此年月の行力を持って。行力も人に依た

祈りをする

ポロンくは珠數
の音

祈りの利ひたまね
をして「シテ」を肩
に掛て背負投げよ
正面へほうり出し
て幕え入る

物おや其方の分ざいとして行力たては置て下
されい。悔お男。悔お汝臺嶺の雲を凌ぎ年行の
功を積事一千餘る日。おんばく。おん妙熊野權現
に願を掛て祈るあらば。なとる奇特のなるべ
き。ポロンく。加様な所に長居は入らぬ。事急で
宿へ歸らふと存る。是は如何な事。偕もく。苦々敷
事おや。是は無念な身共の足で戻るに戻られぬ
事は有まい。偕もく。橋の下。菖蒲は誰が植た
菖蒲ぞ。ポロンく。南無三寶。サア負て往け
其方は是に緩とたりやれ。ノウく。嬉しやく急で

(シテ)漸やく立て
ヒヨロ／＼まなが
ら幕に入る

宿へ歸ふと存る。シテヤイ、此貴き掛出の山伏を
取てこゝいて何所へ行ぞ。人は無る捕へて呉る。
やるまいぞくく



正價金六錢

豫告

來ル三十四年一月以後發行ノ分左ノ通り
○未廣がり、仁王、蚊相撲、聞す座頭、
稜殼、瓜盜人、文藏、栗焼、首引、
毎月二三回逐次出版

一冊ハ郵税共金八錢但郵券ニテモ不苦
遞送料ハ一冊ヨリ四冊マデ金貳錢
豫告御申込ノ方ハ一割引

明治三十三年十二月十一日印刷
全 年十二月十四日發行

編輯兼 發行人 加藤 繁生
東京市麴町區山元町二丁目七番地

印刷者 高橋 信定
東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所 麴町活版所
東京市麴町區紀尾井町三番地

發賣元 東京堂
東京市神田區表神保町三番地

